

Jurong Heritage Trail ジュロン・ヘリテイジ・トレイル

史蹟史料部

はじめに

ジュロンは、シンガポール南西部に位置し、シンガポールの重化学工業(化学・石油精製、造船・鉄鋼etc.)地域として知られています。この地域は、19世紀末まで漁村やカンポン(集落)が点在し、中国系やマレー系の漁師たちが伝統的な漁法で生計を立てていましたが、1960年代、当時の財務大臣ゴー・ケンスイー氏の指揮の下、国立製鉄所、ナットスチール、造船等の工場が造られてから、シンガポール工業の拠点として発展してきました。ゴー氏は労働者たちにブーンレイ地区への移住を説得し、1969年には約16,000人が周辺のHDBやアパートに移り住み、新たな労働者コミュニティができました。また、1971年には、産業用水の貯蔵とレジャー施設造成のためにジュロン川をせき止め、ジュロン湖が造られました。

このように、工業のイメージの強いジュロンですが、この地区の歴史や文化を巡る「ジュロン・ヘリテイジ・トレイル」があり、かつてのコミュニティや文化の痕跡を今に伝えています。今回、中学部史跡史料部3名は、ジュロン・ヘリテイジ・トレイルの中でも、現在史跡として残っている場所を訪問しました。以下に、漁村から工業都市への移行、戦争と復興、都市開発による住民移転を経て、多文化・多宗教が共存する地域として発展してきた歴史を紹介します。



ジュロン湖から見るジュロンの街



出典: https://www.roots.gov.sg/-/media/Roots/Files/jurong-heritage-trail/nhb_jurong_brochure.ashx

1 中国庭園(Chinese Garden)

中国庭園(中国名:Yu Hua Yuan裕華園)は、台湾の建築家 Yu Yuen-Chenによって設計され、1971年から1975年の間に建設されました。その設計原理は中国北部の古典的な帝国建築、特に宋王朝時代(960～1279年)に基づいています。華やかな橋、パビリオン、7階建てのパゴダなどが特徴的で、それらの建造物のいくつかは、北京の頤和園(いわえん)に触発されたと言われています。

同時期に造られた日本庭園と共に、1970～1980年代にかけて結婚式の写真撮影場所として人気を博し、最初の8か月で50万人の訪問者を集めたという記録もあります。また、一時はS\$1,000万を投じた「クロコダイルパラダイス」という施設も存在し、2,500頭もの海水ワニが収容されていたそうです。その施設は、後に「ジュロン爬虫類公園」と改名され、ワニ、コモドドラゴン、ヘビ、カメなど50種類以上の爬虫類が生息する東南アジア最大の公園に成長しましたが、公園は2006年に閉鎖されました。

○Cloud Pagoda(入雲塔)とTwin Pagoda(柑雲閣、炎月楼)

中国庭園が間近に迫ると、この7階建てのPagodaが最初に目に飛び込んできます。Pagodaとは「仏塔」のことで、ミャンマーで作られたものが多いのですが、中国でも様々な建築様式のもの造られました。また、ジュロン湖に面した2つの三重塔のTwin Pagodaは「柑雲閣」、「炎月楼」と呼ばれ、Cloud Pagodaとの夕景は、味わいのあるシルエットを映し出します。



Cloud Pagoda(左)とTwin Pagoda(右)

○Bonsai Garden(盆栽庭園)と中国英雄の石像

「盆栽」は日本が発祥ではなく、中国の「pun-sai」が始まりで、それが平安時代の初めに日本に伝わったそうです。庭園内には様々な容姿の盆栽が飾られ、植えられている鉢もとても個性的です。庭園を取り囲む建築物も、屋根のカーブや壁の模様にも中国色が感じられ、中国風の美を楽しむことができます。また、盆栽庭園近くの竹林内の小径には、中国の英雄(年代順に「孔子」「屈原」「関羽」「花木蘭」「岳飛」「林則徐」「鄭和」)の石像が立ち並んでいます。それぞれの英雄たちがどのような貢献をしたかを紐解きながら、竹林内を散策してみたいはいかがでしょうか。



Bonsai Garden(左)と中国英雄の石像

○Stoneboat(邀月舫(ようげつほう))

中国庭園の蓮池のほとりに優雅に佇むStoneboatは、建築美の象徴としてその存在感を放っています。その名は「月を招く舟」を意味し、水辺から月を眺めるという古代中国の叡智を体現しています。二階建ての建築物は、伝統的な北京様式と現代的なアレンジを融合させており、文化的遺産を尊重しつつ、現代のデザインを取り入れています。



Stoneboat

2 日本庭園(Japanese Garden)

中国庭園から橋を渡ると、日本庭園があります。この庭園は、1973年に、日本とシンガポールの友好を象徴するために造られ、設計は、大阪大学教授で造園家の中根金作氏が担当しま

した。室町・桃山時代の庭園美学に基づいて設計されたこの庭園には、禅の精神に基づいた簡素で精神的な美しさを表現するために、自然石や植栽、水などの自然材料が多く用いられた。

日本庭園の作庭の過程を調べてみると、両国の強い絆と献身的な働きがあったことがわかりました。資金は両国の政府が出資し、施工はシンガポールの業者、大林組、鹿島建設、五洋建設が当たりました。資材も両国の協力によって集められたそうです。例えば、日本(愛媛・鳥取)から約500トンの庭石と10基の石灯籠が運びこまれ、現地産の石庭1,800トンと共に使われました。大池には新潟から送られてきた5,000匹の錦鯉が放され、桜の木や松、梅など日本を感じさせる植物が多く植えられました。現在の上皇陛下が皇太子の時に植樹されたソテツもあります。



完成した当時の日本庭園
出典 circa 1977

この庭園の命名は、公募によって行われ、日本から105種、シンガポールから29種の応募がありました。日本人会理事会で「星和園」が選ばれ、JTC (Japanese Traditional Company) のWoon Wah Siang会長の考えで「SEIWAEN」となりました。正に、シンガポール「星」と日本「和」の友好の象徴としての庭園にふさわしい名前だと思います。以下に、日本庭園の主な見どころを写真で紹介します。

日本庭園は、中国庭園に比べてこじんまりしていますが、日本の「和」「静」「美」を感じられる庭園です。この庭園の美しさに癒されながら、戦後80年の節目の年に、日本・シンガポールの友好と世界の平和を祈りました。



Floral Garden内の太鼓橋



ひっそりとたたずむ茶室



Silver Moon Terrace



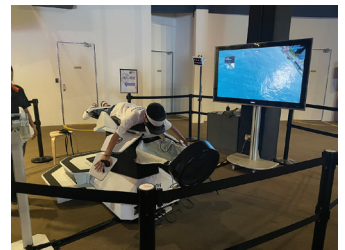
Sunken Garden

3 Science Centre Singapore

あらゆる年代の人々が「科学って面白い!」と感じられる、科学の魅力を「見て・触れて・楽しむ」ことができるのが、このScience Centre Singaporeです。1977年12月10日にトーマ・チン・チャイ保健相(元科学技術相)によって正式に開館され、シンガポール初の本格的な科学教育・展示施設として、またアジアでも先駆的な施設の一つとして大きな注目を集めました。

館内には、14種類の展示テーマがあり、展示物は何と1,000点以上に及び、体験型の工夫を凝らした方法で紹介されています。気候変動や自然災害についてゲームなどを通して学ぶコーナーから、加齢や生命倫理について考えさせられるようなコーナーもあります。私たちが視察に行った時には、鏡で覆われた空間の中で棒を持って確かめながら進む迷路、時間制限の中でレーザーを避けながらクリアを目指すレーザー迷路、VRを使った空中体験のコーナーが特に賑わっていました。

他にも、エネルギーの発生の実演ショーや、巨大な炎の竜巻の発生が見られるショーなども定期的に行われていますので、事前に時間をウェブサイト調べていくことをお勧めします。50周年の節目である2027年には、STEM体験を楽しめる新装のセンターが開業する予定です。



Science Center Singapore の展示物

これまで紹介した3つの史蹟は隣接しているので、歩いて回ることができます。また、近くに「レイクサイド・ガーデン」もオープンしました。その公園には、子どもたちが遊べる遊具がたくさんありますので、是非、休日に親子連れで訪れてみてください。

ここからは、現在も残っている宗教的な史蹟を紹介します。シンガポールの工業の中心地として発展してきたジュロンには、近隣諸国から多くの労働者が移り住み、寺院や教会等を建設しました。異国の地での彼らの心と生活を支えた宗教的な史蹟を訪れることで、現在まで受け継がれる彼らの信仰を感じることができました。

4 Tong Whye Temple (東華廟)

1932年に創建されたこの寺院は、中国福建省・泉州からやって来た移民によって建てられました。寺院の名前は、彼らの故郷にあった同名の寺院にちなんでいます。泉州の移民たちは、旅の安全を祈りながら、故郷の寺院から関帝聖君(関羽)の像を携えてシンガポールへ渡ってきました。

シンガポールに到着した彼らは、ジュロン・ロード沿いのアタップ屋根の家に祭壇を設け、関帝聖君を安置しました。そして1932年には、神像を祀るための恒久的な寺院が建てられました。1967年には寺院がジュロン・ロードのTrack17に移転されましたが、1981年にその地域が住宅地として再開発されたため、現在の場所に移されました。現在もこの寺院は、中国系の人々の信仰と文化を継承する場所として守られています。



Tong Whye Temple の正門

5 Sri Arulmigu Murugam Temple

この寺院は、ジュロンで唯一のヒンドゥー教の寺院です。この寺院は地域社会の尽力によって1993年に設立され、2004年に奉納されました。ヒンドゥー教徒のコミュニティが建設費としてS\$400万を募りました。奉納式には15,000人以上の信者が参列したそうです。

インドから招かれた熟練の職人によって建てられた本堂では、寺院の主神である高さ1.8mほどのムルガン神(ヒンドゥー教の軍神)を見ることができます。また、シンガポールで唯一、火を用いた祈禱を行うための常設施設「ヤガサライ(yagasalai)」を備えているのもこの寺院の特徴です。さらにこの寺院では、聖歌の朗唱を学ぶ宗教クラスも開催されています。



Sri Arulmigu Murugam Templeの正門

6 Tuas Pek Kong Keng Temple (大伯公寺院)

史料を調べる中で、この寺院は、シンガポールが日本軍の占領下にあった時代に起源を持つことがわかりました。ジュロン地域のツアス村は、中国系・マレー系の漁師たちによって築かれた村でした。1942年、日本軍の侵攻により39人の村人が命を落とした後、村人たちは精神的な拠り所を求め、この地区のアタップハウスに財運の神・大伯公(トア・ベック・コン、マレー半島の華人社会で信仰される土地神)を祀ったのが始まりとされています。1960～70年代のツアス地区の工業再開に伴い、多くの村人がブーンレイに移住したため、寺院も1987年にブーンレイに移転されました。現在もこの地で、地域の人々の信仰の場として大切に守られています。



Tuas Pek Kong Keng Temple
の正門

7 St. Francis of Assisi Church (聖フランシス・オブ・アッシジ教会)

1950年代、ジュロン地域のキリスト教信者たちは、アッパー・ブキティマ・ロードにある聖ヨセフ教会まで足を運ばなければなりませんでした。信者の利便性を高めるため、トゥアス村のファティマ礼拝堂、タマン・ジュロン礼拝堂、ゲクポー礼拝堂の3つの礼拝堂が設立されました。しかし、1970年代の都市再開発により、ゲクポー礼拝堂とトゥアス礼拝堂の土地が政府により取得されました。その結果、ゲクポー礼拝堂とタマン・ジュロン礼拝堂が統合され、1976年にブーンレイに聖フランシス・オブ・アッシジ教会が設立されました。

2002年には教会の改修と拡張が行われ、現在では約3,000人の信者が集い、英語、中国語、タミル語、マラヤラム語、タガログ語で礼拝を行っています。また、月曜日から土曜日まで無料の昼食を提供するなど、社会奉仕の伝統を今も守り続けているそうです。私たちが視察に行った時には、土曜日の夕方の礼拝が行われており、信者の皆さんが祈りを捧げていました。



教会内の礼拝堂

8 Masjid Hasanah (マスジッド・ハサナ)

マスジッド・ハサナは、現在のジュロン島を構成する島々からのカンボン(村)の住民が1960年代に移転したことに起源を持っています。これらの島々にあったスラウ(礼拝所)やカンボン、その他の共同施設は、工業開発のために取り壊されました。当時、ジュロンの住民が行ける最も近いモスクはパシル・パンジャンにありました。そのため、ジュロン地域にもモスクが必要とされました。そこで、ジュロン・タウン・コーポレーション(JTC)が資金援助を行い、島々にあった古いスラウの代わりとしてマスジッド・ハサナが建設されました。モスクは1971年に完成し、ジュロンで最初の本格的なモスクとなりました。1989年には再開発が行われ、1996年に再び開かれ現在に至ります。



Masjid Hasanahの入口



(左から) 山中教諭、赤坂教諭、長嶋教諭、両頭さん、宮川参事官、四十万理事



(左から) 赤坂教諭、山中教諭、長嶋教諭

編集後記

今回、ジュロン・ヘリテージ・トレイルを視察し、文化、言語、宗教などの異なる人々がジュロンの、ひいてはシンガポールの発展のために努力してきた営みを理解することができました。こうした史蹟は、単なる建物ではなく、そこに生きた人々の信仰、苦難、希望、そして地域社会の絆を物語っています。過去から現在に受け継がれている史蹟は、先人の努力と幾多の苦勞の上に、現在のシンガポールの繁栄があることを私たちに教えてくれます。また、それぞれの史蹟が造られた歴史的な背景を学ぶことは、現在のシンガポールをよりよく理解し、次世代に受け継ぐべき文化的価値を再認識するきっかけとなります。

ここに紹介した情報はジュロンの歴史のほんの一部ですが、読者の皆様の歴史理解の一助になれば幸いです。皆さんも、地図を片手にジュロン・ヘリテージ・トレイルを散策してみたいはいかがでしょうか。

参考文献

- ・「シンガポール日本人社会百年史」 シンガポール日本人会
- ・JURONG Heritage Trail https://www.nhb.gov.sg/~media/nhb/files/places/trails/jurong/jurong%20heritage_24042015_preview.pdf
- ・The Jurong Lake surrounding the Seiwaen Japanese Garden at Jurong <https://www.roots.gov.sg/Collection-Landing/listing/1105010>